

長谷川葉子(著)
The Routledge Course in Japanese Translation
(2012)

教養教育センター
ブルノティ・ジョシュ
Josh Brunotte

1. 本書の目的

長谷川葉子氏は言語学の専門家であり、カリフォルニア大学バークレー校で日本語言語学の授業を担当する教授である。この教科書の導入部分で、著者は和文英訳授業のカリキュラム編成において自身が経験した問題について著している。著者はこの教科書の中で説明されているような教育課程を構成しようとした際、そのような授業はアメリカの大学にはほぼ存在しないことに気が付いたのだ。そこで、自身の経験と他の翻訳研究者の調査結果などを用い、学生の翻訳能力を最も高めることができると思われる技法を想定し、和文英訳・英文和訳コースの内容を自ら構成しようと考えた。序論では翻訳授業全般について論じる。まず、ここ数10年の間に翻訳のクラスアクティビティが多くの学校から批判されている点について議論している。現代的な教育法を使い語学の授業を担当している教員の多くは、コミュニケーションスキルの向上を授業の主な目的とし、文法的な正確さよりも外国語の流暢に重点を置き授業を行っているのだろう。コミュニケーションスキルに重点が置かれたクラスアクティビティの中で、学生達が間違いを恐れず目標を達成することが最優先とされるため、文法の間違ひは大抵許容されているようだ。長谷川氏は言語学・外国語授業の教育課程(特に大学レベルにおける教育課程)の中で、翻訳のクラスアクティビティには利点があると主張する。その主張によると、翻訳のクラスアクティビティは文法訳読法という教授法(現在、外国語授業を担当する多くの教員が回避している教育法)に類似する点が多いが、翻訳技法を学ぶ大学生達は外国語の文法知識と運用能力をより高めることができるという。さらに、和文英訳のできる翻訳者が少なく、最近多くの日本語母語話者が和文英訳の仕事に依頼されているため、質の高い翻訳をするための技法を用いた教育の必要性を述べている。

長谷川氏は和文英訳・英文和訳のクラスアクティビティの重要性に関して様々な議論を行っている。その一つに、翻訳の知識を得る学生達(英語母語話者と日本語母語話者)は互いに相手の文化への理解を深めることができる、というものがある。文化的な相違が誤訳につながるものが頻繁にあるため、優れた構成の翻訳の授業において、新たに文化の知識を得て理解することで、誤訳を減らすことができるという。誤訳は言語的な違いではなく、文化間の違いからしばしば起こるのだと著者は主張する。大学での翻訳の授業を増やすべきもう一つの理由は、その講義に参加する学生達が第一言語での執筆能力を伸ばすことができる、という点である。母語で明確に書くことができる力、様々な文体を使いこなす力は翻訳の仕事において成功を収めるために重要な能力となるであろう。翻訳者志望の学生達は、第一言語で作文を書く講座も受講することで、将来の翻訳能力をさらに高めることになるという。

長谷川氏がカリフォルニア大学バークレー校で受け持つ和文英訳・英文和訳の授業には特徴がある。その一つは、英語を第一言語としている学生、日本語を第一言語としている学生の両方が受講しているという点である。彼女は、この教科書で紹介されている教育課程を編成する中(最

初の数年間)で、このような様々な背景や経験を持つ学生達に対し、同じ課題を与えていた。そこで、大勢の学生達が第二言語へ翻訳することに苦戦していることに気が付いたのだ。Newmark (1988)によると、第二言語から第一言語に翻訳することが最も適切だと考えられている{「It can be done “naturally, accurately and with maximum effectiveness」(p. 3) (自然で、正確に、最も効果的に翻訳できる)}。左記の理由により、長谷川氏は課題・教材などの内容を変更し、日本語母語話者には英文和訳の課題を与え、英語母語話者には和文英訳の、課題を与えることにした。この教科書の中にはそのような多言語的な練習問題の例が多く見られる:

Exercises 6.1 & 6.2 (Hasegawa, 2012, p. 173-174)

Translate the following sentences two ways, first with verbal construction and second with a nominal construction [以下の文章を、動詞構文と名詞構文の二つの文体を使い翻訳しなさい]

1. お支払いが期日に間に合わなかった場合には、罰金が科せられます。

1. In the absence of practice in listening to others, the children developed limited social skills.

著者は学生の母語に合せた課題を与えているが、翻訳者の第二言語へ翻訳する仕事の需要が世界で高まり続けているとも述べている。フィンランドのような母語話者の人口が少ない国において、第一言語から大勢の人が理解できる言語(英語など)に翻訳しないと、自国の作品を世界に発信したり、観光客を呼び込んだりすることが不可能になるという。英語圏の国(アメリカ合衆国、イギリスなど)では外国語や翻訳の教育システムが十分に発達していないため、非英語圏の国において英語翻訳の教育課程の必要性が次第に高まってきているとも主張する。よって、和文英訳の仕事ができる英語話者が足りていない状況となっていると思われる。長谷川氏は、母語から第二言語への翻訳作業に対する負のイメージを払拭しなくてはならないと述べ、学生達は適切な英訳の訓練を受けるべきであると主張する。

著者は教科書の導入で、翻訳者になるために期待されている能力と磨くべきスキルを明確に記載している。翻訳者に期待される能力と、6つのスキルは以下の通りである:

1. 起点言語の言語的、社会文化的知識と理解能力
2. 目標言語の言語的、社会文化的知識と表現能力
3. 言語変換能力
4. 翻訳トピックに関する知識とリサーチ能力
5. 文体の種類と作文の規則に関する知識
6. 客観的に訳文を分析、議論する能力

(Hasegawa, 2012, p. 22-28)

上記のとおり、著者は教科書を使用している学生達が将来の翻訳技術を上達させるために必要な能力を明示した上で、リサーチ能力と特殊な用語を調べる方法(言語資料、コーパスなどを用いる方法)を学ぶことが、翻訳作業においてに極めて重要な能力であるという。

この教科書では、和文英訳・英文和訳で必要とされる特別な技法を解説し、全体を通してそのコツが習得できるように練習問題が何度も出題されている。さらに、チームで翻訳を行う際のアドバイスや、高度な翻訳作業ができるような段階的プロセスについても記述されている。

2. 本書の内容

授業用の教科書として執筆されており、1学期分、または1年分の教材・練習問題などが掲載されている。各章に、和文英訳・英文和訳を行う際に生じる具体的な問題の解説と、著者の視点を示すための例文が紹介されている。さらに教科書を使う学生達が行える練習問題(英訳・和訳)も用意されている。以下、重要な章について考察する。

2.1 意味の種類

文書を翻訳する際、様々な意味の種類を理解することが重要であると長谷川氏は主張する。翻訳能力を磨きたい学生は、下記のような意味の種類ごとに翻訳演習をする必要がある。教科書の約80ページを使い、抽象的意味、表現的意味、指示的意味、象徴的意味、連想的意味などについて説明されている。例えば連想的意味を論じる章では、語彙・表現などから連想される意味は、社会文化と相互関係があると述べられている。以下は、乗客と女性バス運転手が話し合っているシーンについて、英語で書かれた原文を翻訳した文章である。原文では運転手の性別について触れる文章はないが、代名詞の「She」が使われているため、性別が判断出来る。日本では女性のバス運転手は珍しい。そのため、バスの運転手から男性を連想してしまうということを意識し、和訳する際に状況を明確に翻訳しなければ、原文の意味が伝わらないことになるだろう。

私は、一度、バスの運転手に運賃をごまかしたと誤解されたことがある。女の運転手だったが、私が前に戻って料金を払うまでバスを動かさないとすごまれた。他の乗客はじっと待っていたが、何奴だと思っていたに違いない。

(Hasegawa, 2012, p. 73)

このような例を見ることで、文化と意味には様々な関係性があることが理解できるが、その相互関係を意識しない場合に誤訳となる可能性があるため、長谷川氏は主張する。

また、長谷川氏は起点言語と目標言語において言外の意味が異なることがあるため、比喩的意味の直訳を避けた方が良く注意を促している。一つの例として「白魚のような指」という表現が挙げられる。この表現を英語に直訳すると「fingers like icfish」になるだろう。日本語の原文においてこの表現は褒め言葉であるが、英訳では英語の言外の意味が影響し、冷たくてネバネバするもののイメージが思い浮かんでしまう。言外の意味が異なるため、英訳に否定的な意味を与えてしまい、日本語の原文の持つ意味が消えてしまうのだ。

この章を通じて、学生達は多様な意味の種類とその例文に触れ、文化と意味の関係性を理解し、様々な状況での翻訳に取り組む際のテクニックを得ることが可能となる。このような演習は未来の翻訳者達にとって重要な経験となるため、教科書は学生にとって価値あるものだと言えるだろう。

2.2 文体の種類と規則

また別の章では、文体の種類のパターン、文化を連想させる規則に関する理解が必要であると著者は解説する。基本的に、翻訳作業の目標は原文と同じ種類の文体で訳文を作成することである。よって、英語と日本語、それぞれの文体規則の知識を得ることで、正確に翻訳することができるだろう。

Larson (1984)によって定義された文体の種類について長谷川氏は詳しく記述し、文体の種類の違いを理解するための練習問題・例文などを掲載している。例えば物語文の規則に関して、英語と日本語の時制の使い方の違いを説明している。英語の場合、物語は大抵過去形で書かれているが、日本語の物語は過去形と現在形の両方を用いて書かれていることが多い。英語話者にとって日本語で書かれた物語の時制のニュアンスが分かりづらいため、以下のような例文を通じてその使い方を解説している。下記文章のように、日本語の物語において、人の行動のタイミングが曖昧になることがあると指摘する。

家内が活けた花が明日の展覧会に出る。
(Hasegawa, 2012, p. 112)

この文章だと、家内がいつ花を活けたのかが理解されにくいだろう。言及されている明確な「時」は一つだけのため、ここからはっきりとわかる行動の順序は、家内が展示会の前に花を活けるといふことだけである。よって、この原文は以下 2 つの英文に翻訳することが可能である。

1. The flowers my wife arranged will be displayed in tomorrow's exhibition.
もしくは 2. The flowers my wife will arrange will be displayed in tomorrow's exhibition.

日本語の時制は使い方によって意味のニュアンスが変化するため、物語文の現在形・過去形の使い方に関する詳細な解説は、英語が母語である翻訳者にとって非常に重要であると考えられる。日本語の物語文に現在形が使われていると、話の中の出来事に入り込んでいる気分になり、過去形が用いられているときは、出来事と物語の著者の間に距離を生むこととなる。このような微妙なニュアンスを理解する者は、和文英訳・英文和訳において良い翻訳をすることができると、長谷川氏は主張する。

物語文の規則以外にも、他の種類の文体(手続的説明文、解説文、記述文、勧告文など)を翻訳する際の秘訣が、この教書では紹介されている。様々な文体を翻訳する能力を得ることで、優れた翻訳者になることができるため、学生達は左記に述べたようなあらゆる文体の翻訳演習を通じて、文体の規則を学ぶべきであろう。

翻訳する際、自身の母語以外の言語で書かれた原文を理解するために、母語での文章を読むときよりも、原文の精読により力を入れることが必要であると、長谷川氏は論じる。さらに、原文を翻訳するために把握すべき項目は(1)内容の概要、(2)各用語・文章の意味、(3)各文章の伝達性(発話行為)、(4)各文章の相互関係、(5)原文の文体と論調、(6)原文が書かれた時代背景、(7)訳文の目標、読者であると述べる。このような段階的な手順に従うと良い翻訳ができると長谷川氏は主張する。教科書を使用する学生達は、原文に対する深い理解と分析の一連の行為は、翻訳をする際に欠かせないものであると理解できるという。

この章では「は」と「が」の使い方の違いや、日本語文章の自分本位な書き方(「私」のような人称代名詞の省略、他人の気持ちを証拠なしで報告できないことなど)についても触れるため、様々な和文英訳・英文和訳の問題について学ぶことができる。

2.3 翻訳テクニック

前述の章では、翻訳作業のスキルを磨くためのポイントを紹介しているが、この章では Vinay と Darbelnet (1958)の 7 つの翻訳テクニックの詳細を説明している。教科書を使用する者は、翻訳

テクニックを示す例文や練習問題を通じて、翻訳者がしばしば直面する和文英訳・英文和訳の問題を経験することができる。

技術文書を翻訳する、もしくは原文の持つ味わい(文章が持つ独特な趣)を翻訳でも保ちたい場合には、「Borrowing」(借用)というテクニックが役に立つという。既に西洋文化に広がっている日本語の語彙(カラオケ、漫画など)を用いることで、外国人はその単語が持つ味わいを感じることができ、日本文化に近づくことができる。原語の意味が伝わらない場合、目標言語の単語も同時に使用することで(しいたけ → shiitake mushroom)、訳文を読む人が意味を理解できると説明されている。

時に、原文からの直訳が最も適切な技法となることがある。その場合は「Calque」(翻訳借用)と「Literal Translation」(直訳)と呼ばれるテクニックが用いられるべきである。しかし、直訳しているが故に、時間の経過と共に目標言語が影響を受け、変化することもある。直訳されたことにより、新しい表現が目標言語に入ってくることもあるため(例えば「良い週末を」という日本語の表現は、英語の「Have a nice weekend」の直訳に由来している)、英語話者と日本語話者はお互いにそのような不自然な表現を、時には許容すべきであると長谷川氏は論じる。

日本語と英語の構文の違いが影響し、「Transposition(転位)」が必要になることがある。日本語は動詞構文を、英語は名詞構文を頻繁に用いるため、読者が理解できる構文に転位させて訳文を作成すべきである。目標言語での正しい構文を使用することで、読者の理解の助けとなるであろう(上記の Exercise 6.1 と 6.2 に構文の違いを示す練習問題がある)。この章ではさらなる翻訳テクニックが紹介されており、長谷川氏は訳文に対しての読者の理解を意識しながら適切な表現などを選ぶべきであると、提唱している。「Modulation(調節)」と「Omission(省略)」を慎重に用いると目標言語の母語話者が理解できる訳文を作ることができ、適度に必要な言葉を残しながら説明しづらい表現などを省略することができるという。左記のようなテクニックは非常に大きな調整となるが、訳文に長い説明が必要となる概念がある際に、省略は適切なテクニックとなるのだ。

2.4 翻訳グループプロジェクト

教科書の最終章には、チームで翻訳を行う際の協力、分業の重要性について記述されている。通常、翻訳作業は少なくとも 2 人以上(翻訳者と翻訳依頼者)で取り組むため、学生達は翻訳のグループプロジェクトを通してチームワークを経験するべきである。大抵、翻訳者 1 人だけでは必要な能力を全て持っていないため、翻訳チームにおいて分業、担当を決め(専門用語学者、編集者、査読者など)プロジェクトを進めることが多い、と長谷川氏は解説する。グループプロジェクトに着手するためには、まず(1)なぜこの翻訳作業が必要とされるのか?(2)訳文の読者は誰なのか?(3)翻訳依頼者の目標は何なのか?という疑問を設定する必要がある。この章を通じて、学生達はこの段階的なプロセスを理解し、どのようにプロジェクトの最後に査読作業を行うかということに対するアドバイスも得ることができる。長谷川氏は翻訳プロジェクトを成功させるためにメンバーとの協力、自身に割り当てられた作業を自己評価することの必要性についても明記している。

3. 教材としての評価

概して、この教科書は和文英訳もしくは英文和訳の授業を担当する教員にとって優れた教材であると感ずる。長谷川氏はカリフォルニア大学の授業における特殊な状況に対応するために教育課程を改善しているため、各学生達の母語(日本語か英語)に合った課題も教科書に掲載している。故に、上記のように様々な国籍の学生達を受け持ち、翻訳を教える教員にとって、この教科書

中のアドバイス、練習問題が役に立つだろう。しかし、ほとんどの翻訳授業では受講している学生の母語が同じであるという状況であるため、長谷川氏が用意した練習問題の中から、各教員が担当する授業にあった問題や例文などを選び、授業で行えばよいと考える。

教科書の構成は良く、翻訳テクニックなどの実例を数多く提供しているため、授業で使用する学生達は将来行うであろう翻訳業を想像しながら、翻訳作業において頻繁に直面する問題や、翻訳作業に必要な能力をしっかりと把握できるだろう。教科書を使用する者の英語力もしくは日本語力が十分ではなく、練習問題や例文などが難しすぎる場合には、教員がレベルを調整する必要があるかもしれない。ただし、学生達に挑戦させることにより、翻訳能力だけではなく第二言語の文法の知識や運用能力を向上させ、異文化理解を深めるチャンスとなる。課題の演習を通じてリサーチ力を磨き、英語辞典・日本語辞典の使用にも慣れてくるだろう。翻訳者にとって特殊な用語を調べる能力(言語資料、コーパスなどを使うこと)も重要であるため、例文を繰り返し翻訳することで、そのスキルを高めることができる。さらに、この教科書を使用することで学生達は、グループプロジェクトにおける協力・分業などを学ぶことができるため、学生同士で翻訳作業を行う貴重な機会になると思われる。

現在、英語を母語として話す和文英訳のできる翻訳者が少ない状態であるため、翻訳者の第二言語である英語に翻訳する仕事が今後増えていくと長谷川氏は論じる。ある章では翻訳の歴史、現代的な翻訳技法(例として、原文著者の文化、アイデンティティなどを保つことの重要性)に焦点を当て、わかりやすく説明されているため、教科書を使用する者は様々なスキルを得ることができる。多くの教員が翻訳の授業でこの素晴らしい教材を使用することとなれば、未来の日本人翻訳者たちは、和文英訳作業における必要な能力を高めることができ、十分に将来の仕事に備えることが可能となるだろう。

参考文献

- Hasegawa, Y. (2012). *The Routledge course in Japanese translation*. Routledge.
- Larson, M. (1984). *Meaning-based translation: A guide to cross-language equivalence*. University Press of America.
- Newmark, P. (1988). *A textbook of translation*. Prentice Hall.
- Vinay, J.P. & Darbelnet, J. (1958). *Stylistics of French and English: A methodology for translation*, trans. Sager, J. & Hamel, M.J. John Benjamins.